

第11期第2回府中市美術館運営協議会会議録

- 1 会議名 第11期第2回府中市美術館運営協議会
- 2 開催日時 令和3年8月9日（月） 午後2時から
- 3 開催場所 府中市美術館講座室
- 4 出席者 (1) 委員（敬称略・順不同）
谷矢、橋本、持田、隠岐、佐伯、高尾、金田、吉田、清水、
瑞慶覧
(2) 事務局
藪野館長、相馬副館長、鎌田副館長補佐、尾崎管理係長、
志賀学芸主任、武居教育普及担当主査ほか
- 5 議題 諮問事項「府中市美術館の望ましい姿」について
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者 なし
- 8 発言内容 以下、□は各委員の発言、■は事務局

■今日は、ご多忙のところ、府中市美術館運営協議会に参加して頂きまして、ありがとうございます。お時間になりましたので、会議を始めさせていただきます。

本日の出席状況でございますが、12名の委員のうち、10名の方に、ご出席していただいております。過半数を超えておりますので、会議は成立している、ことをご報告させていただきます。

(資料確認)

(会長挨拶)

□今日は暑い中、風が随分あって、飛ばされないかな、と心配でしたが、前回は1月に開いて、11期の2回目ということで、フリートーキングで、何でも思ったことを気楽に言っていただければ、と思います。

年に2回ぐらいしか開かれないので、「少ない」と前から言っているのですが、予算の関係でできないのでしょうけど、少ない機会ですので、是非、言いたいことは、何でも言ってください。後で、こちらの方で、まとめて答申案を作って皆さんに諮って、最終的に館長の方に答申をする運びになっております。

今日の諮問は「府中市美術館の望ましい姿」ということで、アバウトって言えば、アバウトなのですけれども、前回の答申があるので、お読みになっていただいたと思いますが、かなり網羅的に、いろんなことに対して、ああしたらっていうのが出てきていると思うのですが、それにとらわれることなく結構です。

その後どうなったのか、聞きたいところですし、新たに、こうしたらどうかって、言う意見でもいいです。いろいろ言ってください。よろしく願いいたします。

それからコロナがどんどん増えて、いつ治るのか知りませんが、これからも、美術館を取り巻く環境として、これから考えていかなければいけないのかな、というふうに思いますので、そんなことも視野に入れながら、議論していただければと思いますので、よろしく願いいたします。

(館長挨拶)

■今日は1月10日以来、大変なことが一杯ありまして、開館できない時期が今年もあったりして、大変、問題が多く、美術館の見えるはずのところが見えない。つまり作品だけが展示されていて、私たちが見ることができない。そんな美術館は不思議というか、いろんな問題をコロナが引き起こしているのではないか、と思います。

一方において、本来的には、実際の作品に出会って、いろいろ会話を交わしながらが大事な、とっております。

府中市の美術館は、公立の美術館ですが、そうでないところが多いわけですが、私たちのところは、学芸員、運営企画の職員が公務員という、やはり長いスパンで企画を考えることができます。

また事務スタッフと学芸員と間の一緒にやっていくという、考えていくという、そういう連携がよく、これは帰属意識というのか、市民のための美術館というだけではなく、もう一つ、多摩にあるわけですが、多摩を超えて、日本に発信できるようなレベルの高い、企画をしていきたい、とっております。

学芸会議というものがあり、そこで、非常に多様な意見が出るんです。けれども結局は、どなたかの意見が通るわけですけども、みんな一緒になって、それを支えて行くという、伝統的な、これからも続けて行きたいと思います。

今日は、そういう意味では、ご厚意をいただきまして、美術館としての、これからどんな形の美術館であったらいいのか、ということを諮問していただきたいと思います。

今日は本当に、風の強い暑い日で、緊急事態宣言も出ており、オリンピックも終わったという時に、ありがとうございました。

(会長)

□はい、では議長を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

前にも話しましたが、歳をとりまして、耳が遠いので、是非、大きい声で、はっきりと言っていたらと、助かります。特に、マスクもしていますので、声もよく通らないので、よろしくお願いいたします。

では議題一の諮問事項を、先ほども申し上げましたが、「府中市美術館の望ましい姿」ということで、アバウトな諮問ですが、これについて事務局から改めて、説明をお願いします。

(事務局説明)

■ 1月8日の第1回運営協議会でも、ご説明させていただきましたが、今期の諮問事項「府中市美術館の望ましい姿」は、前期第10期運営委員会の議論や答申を踏まえながら、個別の事故について、さらに発展的なご意見を頂きたい、と思い設定したものです。

本日の会合では、作品収集活動、展覧会活動、教育普及活動、施設整備、広報活動といった、府中市美術館の様々な活動について、それぞれの委員の皆様にご意見を頂きたい、と存じます。

ご参考までに、近年の府中市美術館の活動の中から、基本的な部分を資料に基づいて、説明させていただきたいと思います。

こちらの資料は、令和2年度、令和3年度の成果を書いたものです。まず先の収集活動についてなんですが、令和元年度、2019年には59点の作品を収集しました。

昨年度、令和2年度は、絵画作品6点を購入とります。購入金額は、おおよそですけども1,600万円程になります。また、それと合わせて寄贈作品10点を収集しております。

今年度これまでの状況ですが、絵画作品3点、版画作品2点、写真作品1点の計6点の作品を、およそ3,300万円で購入しております。

ここまで、今日現在の府中市美術館の収蔵作品点数は、開館以来合わせて2,305点になります。

また基金の執行状況は、平成29年度末に2億円で設立した基金であります。平成30年度に、およそ3,000万、令和2年、令和3年と、基金を活用した作品購入を行いまして、作品点数が20点購入、金額の合計7,900万円で、基金の残額ですが、毎年100万の積み増しを行っておりますので、現在の残額が、1億2,400万円となっております。

この基金なのですが、設立が平成29年末で、四年毎に基金の状況を見ながら、金額を見直していくことになっております。つまり、今年度、見直し時期になりますので、今年度末に向けて、基金をさらに積み増すのか、現状の金額のまま、更に四年執行していくのか、ちょうど今、財務当局とのヒアリングが進んでいるところであります。

続いて、展覧会活動についてです。令和元年度、2019年度は、年間258日間開館し、この間の利用者人数が9万1,619人となっております。この人数というのは、美術館開館20年間で、最大の年間の来場者数となっております。

とりわけ、春先に開催しました「へそまがり日本美術展」は、4月1日以降、5月の連休明けまで、3万1,000人、年度をまたいで3月の半ばより開催しておりまして、全体で4万5,000人ほどの来館者が来ております。こちらの展覧会も、開館以来ダントツの来場者となっております。

この他に、開館20周年記念「棟方志功」展、「おかえり明治展」などの展覧会を企画しており、非常に高評価を受けました年でした。

ただ皆さんご存知のように、この年の2月末から、新型コロナウイルスが拡大しまして、年度替わり3月28、29日に閉館し、その後、令和2年度に入りまして、4月になりまして、5月一杯、およそ2ヶ月間を臨時休館しております。

新型コロナウイルスの影響が大きくて、昨年度、令和2年度の企画展示ベースでは、開館日数が217日間、前年に比べて40日あまり少なくなり、また来館者の人数は2万836人で、開館あるいは社会状況も、そうなんです、美術館の展覧会活動を考えた場合に、この年は、当初予定していた展覧会が計画通り実施できない年となりました。

ただ、1年以上の前のことなのですが、新型コロナウイルス影響がどれくらいあるものなのか、まだまだ観測している状態の中で、県境を越えての移動というのが大幅に制限されており、そのため作品の貸し借りができない、という状況が続いておりました。

このため、5月の半ばから7月頭まで、当初予定していた、美術館開館20周年記念の「ここは武蔵野」展に関しましては、開催を断念しまして、代替措置として所蔵品を活用した、「東京近郊、のんびり散歩」展を開催いたしました。

また9月19日から、11月23日まで開催予定だった「動物の絵、日本と、ヨーロッパ」展につきましても、特に海外からの作品の借用ができない、という状況になりましたので、これに関しましては、開催を1年延期しまして、今年9月から11月に開催する予定になっております。

なお今年度、これまでの状況ですが、皆様ご存知の通り、4月に3度目の緊急事態宣言が発令されまして、美術館の方としても、4月25日から5月31日まで、休館をしております。

ただ、スケジュールの方は、これまでのところ、臨時休館日があるものの、スケジュールどおり開催しております、「与謝蕪村」展では4月以降、5月一杯で7,000人、また緊急事態宣言が出た、6月から7月に開催した「映える日本」展につきまして、5,000人あまり方に来て頂いております。

また、現在開催中の夏の所蔵品展につきましては、こちらの展覧会では、市内の小中学生が来ておまして、平日夏休みということもありまして、1日に200名ほど来ております。

続いて、教育普及活動について、です。令和元年度、2019年度には、授業の実施回数が379回、延べ参加者数は9万2,213人。

特徴的なものとしては、ちょうど講座室の斜め向こうの公開制作室で実施している、現在活躍中の作家さんに作品展を行ってもらう、公開制作展を短期間行い、また美術館の中の造形室等で工作等を実施する、アートスタジオが30回、さらに市内の小中学生の美術鑑賞教室、これは小学校22校、中学校11校と、府中市立の全小中学生に参加してもらってます。

では、令和2年度ですが、こちらの方も新型コロナウイルスの影響がありまして、実施する回数が、前年に比べて、減りまして315回、参加人数も2万8,368人となっております。

公開制作については、計画どおり実施しておりますが、小中学生の美術館鑑賞教室につきましては、小中学校3校、中学校2校が感染症の影響で断念しております。

対面を基本としていました、ワークスタジオについては、学芸員による作品解説等の授業については、全面的に開催を見合わせております。

その代替というわけではないのですが、コロナに対応するために、ネット環境を活用し、ネットワークの活用につきましては、以前から、当会のご指摘をいただいております件ですが、新たな取り組みとして、動画配信等を行っております。

アートスタジオとしまして、家庭にある材料を使ってできる、工作内容を動画、それからホームページ上でのテキスト、文章と写真による、手順を説明するような感じで、紹介し、昨年度中には、5本公開しております。

また、公開制作の様子については、随時動画で楽しめるような形、各ご家庭で配信を受けられるような形で提供しておりますし、「メイド・イン・府中」展に関しましても、展覧会に関係したインタビュー等を、それぞれ配信しております。

続いて、施設設備関係です。令和3年度、今年度なのですが、美術館の全面的な、劣化診断調査を行います。こちらは2000年に開館して、建物自体は今年で21年を越える建物になっております。

大体、ご家庭でもそうなのでしょうけど、20年間超えますと様々な設備類の応急手当が必要になります。

美術館においても、照明設備空調、電気設備等の更新が考えられます。また建物全体を、この機会に、全面的に調査しております。まだ先々の予定ですが、劣化診断の結果を見て、美術館の不具合箇所を改修、または機能強化する計画を立てていきたい、と思います。

また、ここには別に取り上げていませんが、令和2年度中に喫茶店のリニューアルも行なっております。中に入って運営している、業者さんが交代したことによって、リニューアルされております。一部、「以前に比べて、料金が高くなった」というような声も聞いておりますが、全体的には「雰囲気が良くなった」と、好評をいただいております。

また美術館の利用者だけでなく、公園の利用者も、特に若いファミリー層、女性層に、好評を受けているのは大きな効果ではないか、と思っております。その辺のことも以前から、協議会からの意見を取り入れて対応しております。

最後に広報活動になりますが、令和2年度に美術館のホームページをリニューアルいたしまして、ホームページ全体の見た目を変え、利便性の高いものにしました。

また先ほど、教育普及の部分でも若干触れましたが、ホームページのリニューアルに併せまして、Twitter、アプリ、YouTube で情報提供し、Twitter については、開館状況等をお知らせするものとし、YouTube については、YouTube 内に府中市美術館のページと言いますか、そこに動画を随時アップして、展覧会の状況などを映像化して配信しております。

YouTube、府中市美術館と検索していただければ、該当するページに行き当たりますので、機会がありましたら、是非、試していただけたら、と思います。

説明につきましては、以上でございます。

□説明ありがとうございました。教育普及活動で小中学生がたくさん来て、本当によくやっている美術館なんですけれども、できなかつたら残念ですね。それで、動画を作って配信しているというのが良かったな、と思います。

あと言いたいのは、令和2年度の展示室の利用者が2万人ということですが、これは開館以来、一番少ないくらいなのですか。9万人が一番多いということでしたが。

■企画展示ベースで行きますと、一番少ない数字になってしまいましたが、残念ながら、最も少ない数字というのは33,000人余りというのが、平成16年度にありました。今回はどうしても、コロナがありまして。

□3年度は、少なくなってしまうのですか。

■今年度は昨年に比べ、だいぶ上向きになっているかな、という気はします。一概には比べられないのですが。休館日数等もありますので。

7月までの状況で、令和2年度は、単純計算で1800人。それが今夏13,000人という状態になっております。

□そういうことで、これからは議題に沿って、まず作品収集活動、展覧会活動の順番に、それぞれの委員さんから、ご意見を伺いたと思います。

これは答申書が、大体その順番で、収集活動というところから出してありますが、ご意見いただけたらと思います。

まず毎年2,000万円ほど投入しているようですが、寄贈も色々あるということで、作品は増えているようです。

2,300点ほどあるということですが、作品の収集活動について、何かご意見がありましたら、是非お願い致します。

□ 19年度の所蔵品というのは、内容がどんなものか、知りたいのですけど。

寄贈していただけるのは、大変ありがたいと思うのですが、収集する価値があるという判断を、どういう経緯で、皆さんが判断されているのか。

購入の場合、サジェスションがあつて、「買わないか」という、それを買うのに決定を、皆さんがどのように判断しているのか。その辺の事をお聞きしたいです。

■ まず寄贈の59点なのですけども、これは東京オペラシティなんかにもコレクションが入っているのですが、寺田コレクションからの寄贈ということになります。

大体、作品が近代以降、特に現代中心の作品群になっております、寺田コレクションに関しては、府中市美術館が、過去に2回ほど、大きくまとまった件数を100点ほど、寄贈を頂いております。

その後、いろいろとコレクションを整理していく中で、3回目のオファーが当美術館にございまして、お手元に残っている作品の中から、当美術館の方で、ある程度を選択させて頂いて、寄贈して頂いたのが19年の結果になります。

もう一つお話がありました、寄贈及び購入の選定基準につきましては、美術館には様々な形で、作品の寄贈、それから売り込み販売、画廊やコレクターさんから、市内の個人の方からも、色々あります。

それらの情報が来た場合に、その作品の性質に伴いまして、美術館の学芸員8人おりますが、その8名の学芸員が手分けをして、作品の調査を行います。写真等を送っていただいて、その段階で、どういう作品か判断し、場合によっては現地に赴いて、実際に作品を見ます。そして、それらの情報を、学芸会議で、これが府中市美術館で収集に相当するかどうかを判断して、美術館の収集方法を選んでいきます。

この後なんですけれども、外部の委員、美術館の学芸員の方ですとか、大学の美術部の方、それから画廊関係の方ですとか、実際の流通、価格を見ている方などに入っていて、この作品を美術館への収集することの可否、妥当、それから作品の診断、それから購入する時の購入価格という場合には、評価額が適正かどうか、審議していただいて、その価値を、美術館に答申していただくという形になっております。

この会議の席上、これは収集すべきだな、となる可能性もありますし、価格についても、それが現在の市場価格より高いので交渉して下げるべきだと言う意見が、出たりすることがあります。

それらの意見を踏まえました上で、再度、交渉したり、購入の場合は予算を基金の方から繰り出して、実際に購入する段取りになっております。

繰り返しの話になりますが、美術館に来たものを全て受け入れているわけではなくて、館内での協議、それから館外からの意見を頂戴して、収集しているということになります。

□そうですね。来たもので、断っている物もあるんですよね。

□私はやはり、作品の内容を考えた上で、購入しているのですが、もう一つ、美術館で収集する意味は、その作品の、いわゆるプロヴェナンス、と言いますか、出所ですとか、既にコレクションされているから安心、ということではなくて、今の美術のこうした取引の時に、意外と押さえられていないのが、プロヴェナンスの問題です。

外国では、「誰が所有していたか」というのは、非常に言うのですが、日本美術の場合でも、「箱書き」というものがありまして、収められた箱に色々書いてある。しかし、これ問題なのは、作品とは離れていることなので、偽物でも箱書きというものが、あり得てしまう、ということです。

ですから、プロヴェナンスにしても、証明をつけてくるものでも、どうしても絶対怪しいというものがある。ですから、私が考えますと、美術史をやっている者としては、「その作品は、どこから来たか」ですとか、「いつ頃書かれた物」ですとか、関連資料が充実していることが、作品としての価値以上に重要です。

でも、そこを重要視するというのが、美術館のような専門家ではないと、普通の人には画面だけ見ているので、画面が美しければそれでいい、と。あるいは、本物だといえればそれでおしまい、という買い方なのですけども、美術館だけは、資料的なものの正確さだけは、できるだけ審査にきちんとして、いただきたいな、と思います。

□作品、収集について、何でも結構ですから、いかがでしょうか。

□基金への積み増しは、必須だと思います。市民としては、やはり、美術館のコレクションを、ますます充実させて頂くことを望んでおります。

先程のご説明にもありましたが、市にとどまらず、内外に名をはせる美術館ということを目指すのであれば、やはり、機を逸してしまえば、この美術館に合う作品が出てきた時に、まず予算ありきの公立美術館ですから、お金がなければ、手をあげることもできないので、是非2億円を常にキープするような形

で、使ったらまた、すぐにプールするぐらいの、手厚いお金を是非、市民は望んでおります。よろしくお伝えください。

□そうですよね、それは2億円どころか、10億とか、20億とか欲しいところで、以前に東京国立近代美術館へ行ったら、セザンヌの絵があったので、「どうしたんですか」と聞いたら、「買った」と言うので、あまり宣伝もしてなかったのに22～23億円と言うので。そういうの買えるんですよね、お金があればね。

□しかし、非常に貴重な作品を、2年前でしたっけ、購入することができたのも、基金があったからで、あの作品はこれから、様々な展覧会に引き合いがあるはずですから、そのたびに「府中市美術館所蔵」とキャプションに書かれながら、あの作品が歴史を積み重ねていくことは、本当に嬉しいことですので、そういった作品の収集を続けていくためにも、基金は必ず必要なものですから、建物だけあっても、学芸員がいらっしゃっても、作品がなければ、どうにもなりませんので、そこは行政には是非頑張っていただきたいと市民は、強く思っているのですが。

■ありがとうございます。この基金は2億円を積み増した当時から、美術館としては、「毎年、確実にコレクションを増強していかなければならない」ということ、それから「市場の動向等に対応して、タイミングで行かなければならない」という、二つの側面から基金が必要ということですよ。

毎年、積み重ねて行くのが1部門として、4年で1億円、緊急に対応する部分で、4年かけて1億円、というような説明をしていたのですが、もちろん、作品によってはそれにとらわれることなく、継続的な収集を行いながら、緊急的な対応をしていきたいな、と美術館側では考えております。今の意見は、非常にハイレベルで、ありがたいと思っております。

□他にいかがでしょうか。作品に収集について。

□質問したいのですが、先ほど事務局が収集に関する話を、お話していただいているのですが、例えば現存の作家とか、作家の身として気になる場所なのですが、現存の作家の作品収集というのは、展示とか教育普及に絡んだ作品を中心に選んだりということに、なっているのでしょうか。

■必ずしも、この美術館で展覧会に出品頂いている、あるいは教育普及活動で制作して頂いている、ということが必須条件ではありません。

美術館の収集方針として、府中、多摩地域のゆかりの作家といっても、「生まれた」、「育った」、「現在ここで暮らしている」、あるいは「近隣の大学で、トレーニングを積んだ」など、色々かなり広く解釈できるものなので、その範囲内で、収集方針に寄り添った形で、さらに府中市美術館として是非購入したいという作家であれば、収集の対象として、テーブルにあげたい、と考えております。

■収集基準に係ることだけではないのですが、現存の作家に関しては、評価がしっかり確定していない部分もありますので、美術館の活動を通して展示なり、そういうことに耐えられるかどうか等々をはかると言うか、機会ととらえて、積極的に収集につなげていく、というのが始まっています。

□現存の作家となりますと、例えば今後、継続して生活していくかどうか、という不安ですとか、問題点もあると思うんですけれども。

あるいは作品価値を認められるのか、問題点が出てくると思うんですが、府中市美術館の近隣には、たくさんの現存作家が住んで活躍している。

美術大学が八王子から小平まで、いくつもあるので。正直言ってセザンヌよりも安いような状態で、作品を増やすことができると思うので、何か若手と言うか、枠として、多摩地区の作家を買い取る、というようなことがあってもいいのかな、と思います。

あと絵画って、作家の場合、デビュー作の方が、すごく後々、重要になるということがあろうと思うので、例えば美術大学で、優秀展みたいなものが行われるんですけども、そういったところは、1年間かけて、みんな作るので、すごく濃密に作られた作品が多いから、年代にかかわらず、そういった目で見て良い物を、一点購入していく、みたいなことがあってもいいのかな、と。

実現するか、どうかは別として、考えとして申し上げておきたいと思います。

■そうですね。美術館の作品の収集について、個人的な想いも若干含めてのことになるんですが、現状、公立美術館の収集した作品というのは、末代までと言いますか、50年、100年保存していくことが求められます。

ひとつは、公立の場合に、どうしても税金で購入するということが前提になりますので、そう言いますと、どうしても、保守的と言いますか、ある程度、価値の確定したものを購入していかなければという思いがあるのですが、一方で美術作品の価値っていうのは、時代、時代によって、変遷してことはあります。

例えば50年前、あるいはバブルの頃であれば非常に人気があった作品が、現在は評価が低くなっていたり、あるいは100年単位で見た時に、今では非常に重要になるというのがありますので、そういう意味で作品のコレクションというものは、非常に変遷してくものなので、これを見極めていくのが美術館という組織の役割かな、と思います。

そういう意味で収集とは、ある意味、後者を含める側面で恐れてばかりいてはいけないな、というのがあります。

それと、もう一つなのですけれども、現代の作家に関して言えば、かつて、これは100年ぐらい前であれば、今と比べて、それぞれの地域性というのが、はっきりとしていた。

色も情報も今ほど流通してない状況ですので、その中で現代美術のどの分野に特色を当てて、限られた購入資金で特色ある現代美術コレクションを築き上げていくか、というのが開館以来、現在も抱えている課題と言いますか、問題だと、思います。

その辺も含めて、現代の美術を収集していく必要性を十分認識しているわけですが、一方で、どのように集中していくかということは、美術館の中で引き続き検討していかなければならない課題だと思います。

■すいません。いま委員の方から、お話がありましたが、寄贈と購入の二つの面で、例えば寄贈の時に、先ほど寺田コレクションの話が出ましたけれど、海外で約800点、合計で陶芸とか含めると1000点ぐらいだと思います。

その中で、目ぼしいものを学芸員が調査写真を撮って、状態を調べたものを、こちらの学芸員へ、回してきたんですね。その美術館では、相当、寄贈を受けているんじゃないか、と思ったんですが、私たちは2回、3回です。そして最終的には、学芸員が担当した企画展に出品する目処が立ったものを選んでいきます。

非常に少ないもの、名前があって、今、府中市美術館が所蔵しなくてもいいんじゃないかという場合は、他の美術館にそれを、例えば、早稲田大学歴史博物館ですとか、他の美術館ですとかへ紹介する形を取りました。

ですから責任を持って、学芸員が自分の展覧会に出せるというような自信を持って選んだもの、と私は考えておりますし、先ほどの購入で、学芸の話が出ましたが、学芸会議で、本当に必要なんでしょうか、と意見があって、これにしたっていう話を聞いております。以上でございます。

□よろしいでしょうか。収集には、色々基準とか、難しいところがあるようですけれども、他にどうでしょうか。なければ、また後ででも、全然いいのです

けれど、収集の話に20分ぐらい経ってしまったので、次の展覧会活動という項目がありますけども、「収集の話で思い出した」というものがありましたら、展覧会活動でも、ご意見を頂きたいと思います。

展覧会活動は、答申の方を見られたと思いますが、開館30周年だとか、40周年ですとか、きりがあるわけですね。予算もつくでしょうし、展覧会も、それに向けて何かやりたい、というのがあります。

ただコロナウイルスをどうするか、という難しい問題もあると思いますけれども、「こうしたらいいんじゃないか」とか、ご意見がありましたら、是非お聞かせください。

□私ばかりお話して申し訳ないんですが、今、コロナの時期にあって、それがいつまで続くかわからないんですが、例えば海外の作品が収集できないために、展覧会が変わったということが起きたと思うのですが、そういう時に小回りが利くと言うか、フットワークの良い現代の作家を集めてきて展示する、というようなことを考えてもいいんじゃないかな、というようなことを、今、緊急の状態だと思います。

それにつなげて、先ほどの収集の件で、近郊の大学や、近辺に住んでいる作家も多いことから、その中から現代美術でもいいですし、大学の優勝者でもいいですし、例えば大学の先生とかにチョイスしてもらうとか、何かそういった形で多摩地域の、すごく新鮮なフレッシュな作品の何か企画があっても面白いかな、と思います。

やっぱり、美術の展覧会と言いますと、年配の方が見に来る、あるいは小学生が見に来るとというのが、割と多いような気がするのですが、例えば、六本木の森美術館ですとか、若い人たちがデートしながら何万人も見に来るような、そういう若手の人に伝わるような、若手の作品だからこそ現性を表して、若い人まで呼び込むような、今、スポットになっちゃっている年齢層を取り込むような作品を置いてきたからこそできるのかな、と考えているので、そういう案があります。

あとは実は、公募展ということも考えられるのではないかと、思っていて、作品を募集して、展示していくという、非常に手間がかかることなので、実現するかどうか。

一つの意見として、例えば作品を収集するため、公募展を企画するということは、いいですし、展覧会自体を公募するということも、新鮮な発想に繋がるのではないかと、思っております。

そういったことから、いま美術のアートブックとか、本に対して、世代ごとに興味を持たれているので、そこにアートブックフェアみたいなことをやっても、すごくいいなあ、と思います。

何かそういう今までの企画と共に、ちょっと違う作品の展覧会っていうのが進んでいったら、また違う層の人が入ってくるのかな、と思います。

ちょっと、まだまだ抽象的な話で申し訳ないんですが、そういった考えも、いくつか持っております。

□公募展というのは、美術館が主体となって公募してやる、というようなことですか。

□そうです。大学生とかは、とにかく作品を作っておきまして、公募展に対して物凄く積極的なんですよね。それを日々、私もちょっと大学にかかわっているので、日々見ている、とても一生懸命仕上げてますし、すごく意欲もあります。

□例えば、大学の美術館なんかで、あんまりやらないんですか。

□あんまり聞かないですね。学校ごとに、少しずつ研究室ごとにやらせたり、とか各学校で見てるんですけど。

□多摩地区をテーマにしたのやっていますよね。

□八王子の美術館が、公募展をやったりとか。あと県立の美術館で、群馬のビエンナーレというものを、公募でやっております。

□やっていると思います。ちょっと現実的ではないのかもしれませんが。

□展覧会で実際に、昨年、今年とメニューを組んでいく中で、外から作品を借りてくるということが、しかも数多くの館が、ひとつの展覧会で10館も20館も借りてくる、海外からいくつも借りてくるというのが、昨年に比べて、だいぶ状況的には協力いただける体制にはなってきているんですが、海外に関しては、まだまだ先が見えない状況が確かにあります。

そういった中で、国内の全国のコレクションを活用していくというのは、今までの、どうしても海外の作品をありがたがって展覧会を開くという体制か

ら、より足元にある資源を見直して、それを活用していくという視点が大きくなると思います。

ただ、それが、どちらかと言うとコロナ禍だから、その代替として現代作家、地元の作家を取り上げるという視点では、どうしても作家さんたちに対して、失礼な極みというわけでもないんですが、それもあります。

そういう視点ではなくて、常に地元、国内のコレクションを活用していくという視点に美術館全体の活動が進んでいく、と思います。

府中市美術館では、やはり収集の方で言ったように、地元の府中、多摩の開館以来の美術展のビエンナーレ展、あるいは地元の作家さんの地元ゆかりのエキスキューズじゃないんですけども、意義づけをした上で、取り上げていくということで、常にそういった活動については、考えていきたいと思っております。

■貴重な意見ご意見をありがとうございます。現代作家との関わりについてはいま申した通り、現代の美術展を中心に我々も日々精査しておりますし、努力しております。

例えば12月から開催する池内、現存作家ですが、池内さんは調布と稲城市で育って、最近、仕事の関係で引っ越しをされてしまったんですが、ずっと稲城で暮らしておりまして、多摩川を挟んで、多摩丘陵の風景を見て過ごして、全ての作品に反映させているような活動されてる方なので、そういったような取り上げ方を通して、地域の作家を全国で十分に評価できるような作家であるというように考えております。

ただ機会が少ないので、多摩地域の美術関係の資源を十分に絞りきれていないのも事実なので、こういう作家は限られてしまうので、いろんな形で資源を発掘する、地域の文化を盛り上げていくようなことができたらいいな、と考えております。ありがとうございます。

□今みたいに若い世代の人たちが、考えているような美術館活動っていうのもあると思うのですが、我々の年代になると、私も20年間、この美術館でいろんな勉強してきて、楽しい思いをしてきたんですが、ここ何年間か、随分変わってきたな、と思うんですね。

多分、学芸員の方が、いろんな企画をいろんな角度から検討して行くのが、見えるんですね。ですから会場で見ていると、来る人達も色んな若い世代、幼い子、それから最近多いのが、幼児や乳児を連れた母親だったり、そういう人たちが、そこで、ゆったりと見ているような、これがまた、この美術館の良い

ところだと思いますし、企画をされる方がすごく工夫されているんじゃないかなと思います。

展示方法も随分色々とおち動かししたり、こっちを動かししたり、やっているんだろな、と思います。そういう点で、発展途上で、まだまだ府中市美術館はあるんだなと、すごく安心をしております。

一つ気になるのが企画される対象を、どこにしているのか。「そんなに限定できないよ」というのがあるかもしれないんですが、かなり広い層の人を狙っているな、と思います。

その中でも、やっぱりピンポイントがあると思うんですね。もう少しうち出してもいいのかな、と思います。

それから、もう一つは大変嬉しいのは、府中市美術館の記事が新聞や、テレビ番組でも随分出てきているんです。これは陰の力の素晴らしさだと思います。

コロナの関係もあるのですが、美術館でゆったりと観賞する人が多いのですが、その中で、そこは色んな考え方があるかもしれませんが、解説してる文があるんですね。

あれを一生懸命読んでみると、すごい時間かかるんですね。解説が。多分企画される方は、これも分かって欲しい、あれも分かってほしい、こういう流れがあるんだよ、それが公に発展しているだと、いろんなことを作っているんだと思います。

それは大変よくわかるんです。ただ鑑賞している人を見ると、その文を読んでもただで疲れているという感じで、肝心なのは、こっちの作品を見て欲しいと。

そのところが、すごく気になったので、「どうしてかな」と思って、少し気になって声をかけてみたんですが、「この作品は、こういう見方ではなくて」と言われたんですね。

「いや、もしかすると展覧会を企画した方が見る人の発想を、引き出すようなきっかけをつかむ文章だと思います」と、そう答えたんですけども、「でも私は、ここで言われていることと全く違うことを考えるんです。だから、それでいいんじゃないですか」と。

その時はハッとしたんですね。一生懸命、分かっていたきたいから書くんですけども、それが丁寧になりすぎると、かえって、そこに制約を受けてしまう。

ですから、もう少し「あなたなら、どう考えるの」というようなニュアンスが、パッと出てくると、会話が生まれてきて、作品をもう一度見てみようかと、いろんなことが出てくるんじゃないか、と思います。

是非、そういう呼びかけ、見る人の発想が湧くような、きっかけになるような、何かニュアンスを入れていただけると、さらに、いいんじゃないかな、と思います。

これは府中市美術館だけでなく、いろんな美術館もそうなんですよね。ものすごく丁寧に本当に、あれだけ読んじゃうと、疲れちゃうんですけど、それを詳しく知りたいのだったら、カタログなんか見ればいいんですから、あそこでは作品を見て考えていただきたいと思います。そこだけ、是非、ご考慮いただければと思います。

□だんだん良くなってきているというのは、良かったと思います。本来だと、絵は自分で見て説明はいらないよ、っていう人も随分いますけれど、僕なんか、よくわからないけど読むと、わかりやすくていいな、というものがありますので、難しいところですけどね。カタログ買ってと。

あと新聞社で、でかい何十万人も入る展覧会をやったんですけども、解説なんかあると人が溜まっちゃうので、「止まらないで下さい」と言ってたんです。

ここは本当に、ゆっくりと、じっくりと美術館によって、展覧会内容によっても、しっかり説明したいんだ、っていうのがあるし、そうではないところとか、いろいろあるんですけどね。押し付けがましいのは、良くないですけどね

□私だけは、押し付けがましいと、思っているかもしれませんがね。

□ちょっと、よろしいですか。大変難しいことだと思うんですが、学芸員がこれだけは伝えたいというような思いと、そうすると見方を限定してしまうという、その問題がいつも決まって出ると思いますね。

そうすると芸大のある展覧会へ行って、入口のところで iPad みたいなものがありまして、作品の前に行くとき出るんですよ。コメントが。見なくてもいいんですよ。

だから、要は自分で携帯電話でも、できる事だと思うんですが、たまたま歴史のそういうところで説明を見たかったら、「番号を押して下さい」というものもありますから。

現代的な工夫というのは、あり得ると思います。ただ私、今日のぱれたん展覧会を見ていて、クイズって、子供へ導入するには良いけれど、クイズの答えだけわかったら次へ行ってしまふ。これは、せっかく良い絵画なのに見ないで、回答だけを探して次のナンバー2に行く。これはどうかな、と思ったんですね。

そうでなくても、終わった後に、自由に製作するということもあったんで、そこには、たくさんのお子さんが参加していたんですが、だから、すごく難しい。

どれくらいの内面で、どれくらいでやるのか、っていうのも難しいけれども、少し新しいメディアで最低限の情報は入る。「もし解説が知りたかったら、あなたの携帯電話で、ここを表示してください」みたいなものも、これからも、やっていくのも必要な、と思います。

やっぱり私は、「解説があれば、読まなくちゃならない」と思ってしまうところがあるので、せっかくお金を払っているから、情報にしないと損というように思うことがあるんじゃないかと。

□字が小さくて、僕は老眼だから、いちいち、これをかけて絵を見ないで、こっち読もうと、人が読んでいると邪魔になってしまっ、でも学芸員は、あまり大きな字を書くと、かっこ悪いので、なるべく小さくする傾向があるみたいですけれども。

□メディアだと自分で拡大して見ることはできますし、そういうメディアを使わないという手もあります。ですから、どちらがいいのか分からないですけど。

□イヤホンガイドでも、その前に行くと言明するとか、それは色々ありますけどね。

□いいですか。今ちょっと展覧会の話がありましたけれども、先ほど公募展の話なんか出ましたけれども

□僕が勤めている世田谷美術館は、世田谷文化財団という指定管理者なんですけども、劇場と美術と生活デザイン、文学、音楽と5つの部門と、あと国際交流の六つの部門で構成されているんですけども、区と連携して世田谷芸術アワーというのをやっています。

区に拠点がある人、住んでいる人、そういうので各ジャンルで応募してもらって制作の支援金とか出して、発表の機会は、美術館であれば、区民ギャラリー。

ここも市民ギャラリーがあるんですが、そういうところで2週間、劇場もパブリックシアターと言うシアター プラントと、主要劇場と副劇場があるんで

すが、プラントは600人ぐらいの劇場を2日間提供して、劇場の方は、うちの財団の技術部門が協力して、サポートしながら公演をする。

音楽もデザインも同じなんです、そういう形でやっているのが1つありまして、それはビエンナーレ方式でやっているのですが、意外と多くのアーティストが応募してくれます。

美術は、だいたい2組2人ユニットを選ぶことになっておりまして、劇場はひとつかな、応募数も多くないですから、これはかなり継続して行っています。

もう一つは、僕は長いこと関わってますが、石川県の小松市に宮本三郎美術館というのがありまして、そこで14年ぐらい前、前の市長さんが何かアートを使って町おこしというか、何か活動ができないか、と。その市長が結構、意欲的だったので。

宮本三郎というのは、デッサンの名手と呼ばれ、非常に良い作家だったんです。「では、デッサンを対象としたコンクールを開いたら どうですか」という提案をして、これ全国的に見ても世界的に見ても、デッサンのコンクールは他にはない。

どうせやるなら、どういう形であればいいか。賞金は10万とか、20万とか。「100万くらい出さないと、いけないじゃないですか」と、言ったけれども、そういう形になってビエンナーレでやっていて、今年6回目を迎えます。

初回が大体600ぐらい集っていて、海外からも来ます。それは一つに美術館が一つの基軸となって、本当に小さくて、平日なんか10人か20人しかお客さん来ないんですけども。ただ、そういう事業をやることによって、町に人を呼び込むんだり、若い人たちが、すごく多い。

小松は九谷焼きの発祥地で、入場者たちには九谷焼院の小箱をプレゼントしたり、小松産の野菜を送ったり、そういった人が町と、もっと交流をするきっかけとして授業やっています。とても面白い試みだと思うんですね。

府中市は 地域的に守備範囲が非常に広いので、そんなこともできるんじゃないかな、と話を聞いておりました。

あと、話がありました解説板のことですが、僕らの間では、コロナになってから特にそうですが、「密を避けるために、パネルの文字のキャプションを少し大きめにしよう」ということをやっています。それと文章の内容は普通の高校生が分かるぐらいの雰囲気の記事にしております。

この二つを、ここのところやっているという感じですね。長すぎない方がいいし、やっぱり、きっかけなんで押さえるべき事実は押さえて、後はイメージが広がるようにしなければならない。

なかなか難しい中、うちの館長に言わせると、「誰も真面目に読まないんだから、そんなに真面目に書くことないよ」と言うんですけれども、時間の無駄だと言われるけど、やっぱり、それは学芸員が勉強して研究して、それをわかりやすくブレイクダウンしていくような作業ができればいい。

解決の道が開かれるのじゃないかな、という気がしますね。なんか非常に難しいですけどね。私も展覧会を見に行って、「あ一面倒くさい」と思いますよね。兼ね合いが難しいとこですけどね。

□ケースバイケースで、そこがある面では学芸員の腕の見せ所と言うか。どれくらいの説明をつけるのか、どれくらいの大きさでやるのか。見て気持ちいい方がよく、是非、参考にしてもらってください。

■非常に感心しました。この運営委員会で、こんなにレベルの高いご意見いただいたのは、初めての気がしました。

というのは、我々の美術館で、お客様に何を伝えるかって言ことなんですけども、画像でも情報でもなく、やはり感じるということだろうと思うし、それをどのように伝えようか、と私どもを苦しんでおりますが、それを必死に読もうとするお客さんも来られます。

でも、その中で我々は、その先、作品を見て自由に感じていただきたい、という願いをもっております。

その中でも鑑賞教室と言う小学生に対してやっているのですが、何度でも美術館へ足を運んでみる。いろんな担当が話をして、こんな見方でもいいのかというようなことで、近づいていくってという。何でも美術館に来ていただく中で、ようやく作品に近づいていくことがあると思うんですね。

それを我々が目指しておりますので、展覧会の中では、若向きの現代美術系の展覧会をやったり、明治の年配層に向けたりとか、市民のいろいろな年代へ向けて、組み合わせさせてやっておりますし、その中でも、学芸員の芸風と言いますか、いろいろ違うところもあるんですが、自由に感じる美術館になりたい、という願いは思っておりますので、委員のご意見は、非常に高次の目的だと思いますので、学芸員の努力目標にしても、いいかなと思いました。ありがとうございます。

□何でも言うていただければ、みんな感謝されるようですから。

□さっきの話あったように、ぱれたんの展覧会を見てきたんですが、文字が読めるようになった7歳の娘と、まったく文字が読めない3歳の息子と連れて来たんですね。

やっぱり本当におっしゃる通り、クイズがあると楽しいので、夢中になってやるんですが、上の子は、そればかりで、お友達と一緒にいったんですが、「クリアして良かった」という感じで、「絵を見ているの?」という感じで終わっちゃったんです。

3歳の息子は、まだ文字が読めなくて分からないので、好きなところを、ふらふら歩いていて自由に見せていたんですが、藪野先生が今回の展示で描かれた、ぱれたんの絵が、いっぱい描いてあるのが並んでいるところがあったんですけど、そこは食い入るように見ていたりして、ケラケラ笑って、「はしっこに書かれている、ぱれたんのパレットは、可愛くないね」と。

自由に見られるので、いいなって思ったのと、迷路も楽しかったんですけども、クイズがあったり、ワークショップ的に描かけるところがあったと思うんですが、今回ぱれたんの塗り絵をやっていて楽しかったし、絵の具で綺麗に塗るのもいいことなんですけれど、作られたキャラクターを塗るのを美術館でやるっていう教育的な意味はどうかと考えると、自由にかけた方がいいのかなと、そういうことは強く感じました。

□とにかく、まず1回来れば、その後、楽しいことがあるし、受け止め方も、それぞれ違うし、本当に展覧会は、人それぞれみたいな所ありますけど。

他にいかがですか。じゃあ展覧会事業の話になると、結構長くなりますので、次の教育普及活動についてご意見をお伺いいたします。

□私は小学校の校長しておりますので、美術館にお世話になっております。府中市の場合は、府中市美術館があるので、利便性があり、すごくありがたい思っております。

今、学習指導要領でも美術館との連携ということが書かれているのですが、なかなか、それが実践できない地域も、たくさんありますので、そういった面では、府中市美術館は、小中学生が無料で入れますし、そういったところが、すごく地元で密着した形を取っていただいているかな、と感じております。

美術館鑑賞の方も、資料を見てお分かりのように、令和元年は全校でやっているんですけども、2年度以降はコロナの影響で、なかなか「人が集まる場所へ行きなさい」という指導ができないものですから、そういった関係から多少の温度差が出ているのが正直なところですよ。

場合によっては、美術部を中心にですとか、あるいは「夏休み期間に自由に行って」と宿題的なもの、課題的なものを与えることは、できなくはないんですけども、それも保護者のお考えによって「行かせる」、「行かせらない」というお考えがあるので、そこは致し方ないところですので、各家庭にお任せするしかないのかな、といったところです。

今日、教育現場でもICTが進んできております。ただ府中市の場合、まだまだ容量が足りなくて、いま同時に3学級ぐらいしかアクセスできないのですね。それ以上になるとフリーズしちゃうのですから。

それは教育委員会に話して、解決に向かう努力をしてもらっているのですが、そうなってくると美術館で色々インターネットを通じた取り込みをされてきていますので、今後それをうまく活用していきたい、というふうに思っております。

というのは、美術の授業は1クラスですけど、社会や理科や他の学習活動で他のクラスがタブレットを使っていると、やっぱりフリーズしてしまうので、そこは課題なんですね。

今後、期待できる部分も大きいところがあると思っておりますので、そういった形があれば、府中市美術館の小中学生だけではなく、調布市や稲城など他の地域の学校もしやすくなると、もっと伸びていくかな、というふうに思っておりますので、是非、この辺りをうまく活用して頂ければと。

それと宣伝活動もしないといけないので、それも期待したいな、と思っております。

本当だったら、現場に連れ来るのが、一番なんですけれども。

一番いいんですけども、連れてくること自体が大変なので。

コロナが治れば、それは、できるのですか。

できなくはないんですけど、時間調整が大変です。やはり校外活動なので。

そうすると、やっぱり夏休みとか、休みの時に希望者だけ集めて、先生が連れて行くとか、そういうこともできるのですか。

集めるとなると、それなりの団体というか、美術部とか、何年生とか、有志とか、とにかく学校が絡むと、全て教育活動になるので、それは教育委員会にちゃんと申請しないとイケないので、そこが課題であるんですけども。

□「自由に行ってみようかな」という動機づけするようなことは、いろんなシステムで、できるといいですね。

□そうですね。中学生なんかになると、思春期の芽生えとか、第二成長の時期ですので、いろんな想いがあって、面倒くさもあるんですね。正直言って。というところで課題にすれば、致し方ない、という思いで来られた子もあるんですが、私はそんなことよりも小学校から先ほどお話がありましたように、美術館に馴染んで行けることが大事かな、と思っております。

□本当にもったいない、と言いますか。いい市ですね。

□そうなれば、中学生になっても抵抗感なく、ずっと入っていけるかな、という思いはあります。

□昨年度の美術館鑑賞教室というのは、対面で行われたものですか。

■昨年の状況、そして今の美術館としての課題について、簡単に担当の方から説明させていただきます。

■昨年度の鑑賞教室の実施の状況ですが、小学生について22校のうち、実際に来館することができたのは14校。コロナの状況が変化しましたので、日程を延期するなどして、なるべく美術館で鑑賞授業したいということで調整しましたが、どうしても2月末で終わってしまうので、この美術館内で実習をしました。

その場合も、なるべく大きな部屋で、大きな作品を使って、ギャラリートークをすとか、狭い部屋に集まって、ガイダンスをしないとか、密にならない工夫をした上で、バスの利用も行いましたけど、実習することができました。

その他の5校については、どうしても日程が組めなかったために、こちらから出張授業を行いまして、学校の方で動画を使った授業を行いました。それでも3校は実習することはできませんでしたので、それらの学校については1年間有効の招待状を配布いたしまして、「無料で来てください」というようなアナウンスをしました。

開館以来、初めてということですが、中学校につきましては、毎年夏休みに個人鑑賞という形で、学校で取り組んでおります。ですけれども事情で2校ほ

ど取り組むことができないという連絡ありましたので、休校の実施ということになりました。鑑賞教室の昨年度の状況については、以上でございます。

□小学校は何校あるんですか。

■小学校は22校、中学校が11校になります。

□学年は、決まっているのですか。

■はい。小学生は4年生から6年生の学年で決まっております。最近では4年生の学校がなくなりました。5年生と6年生が半々。中学校につきましては、1年生が対象になっております。

□学校の授業と連携している場合は、学校の先生は、よく分かっていると思うんですが、一つには学校の距離によっては、前後の移動時間を考えますので。しかも、そのクラスだけではなく、1学年全ての生徒に機会があるようにと、そのあたりの調節を現場にご協力いただいているので大変かな、と思います。

美術館にとっては、やはり直接来てもらって、見てもらいたいというのが本義ですし、そこに繋げるような展開をしていきたいと思っているんですが、昨年以来のコロナの状況、それとIT教育普及という中で、美術館へ来るきっかけになるような学校で授業を行なって、さらに美術館で鑑賞するには、どのようなメリットがあるのか、今の状況下、先々のことまで含めて考えて行かなければならない事実かな、と思います。

■具体的に、私も参加したんですが、小学生の生徒達が「今年は、何もできず、初めてここに来ました」と非常に喜んでおられたのが印象的でした。外に出ることができない、みんなと一緒に行動することができない、ということがあったからじゃないか、と。

それから、何回かしかできなかつたんですが、「母親と子供のための0歳児の初めてアート」というのをやっております。0歳ですから、「それでわかるのか」って言われたりするんですが、お母さんが抱っこしたり、子供と一緒に幸せな気持ちになって、ゆっくりできるっていうのが、やはりお母さん自身が、例えば10人のうちの2人か、3人ぐらいの人は、いらっしやっただけかあるんですが、それが少しずつ広がっていくんじゃないか、と思います。できれば、楽しい時間を過ごしていただければ、と思っています。

それからもう一つ。今の学芸担当から話がありましたけれども、実際にそれも文化庁の予算でアカデミーというのがあります。ただし問題点がありまして、大変手続きが、ややこしいのと、もう一つは早い時期に、春の時点で10月、12月の計画していかなければならないので、なかなかスケジュールを組むのは大変ですが、私たちも鋭意努力したいと思います。

そのときは出来れば、地元の自信を持って、「一緒に絵を書いたりするのが楽しいな」という気持ちになってくださればいいな、と思っております。以上です。

□先程したかった話がありまして、自分には中1と小学校5年生、あと未就学児の子供がいるんですが、先ほど話が出ていました中学生1年生の課題授業の話聞きまして、自分も本当は一緒に美術館に来て見たかったんですけども、仕事が忙しくて、奥さんに行ってもらったんです。

自分の気になる作家さんを見て、それについて作文を書くという課題だったんですが、「府中市の縁のような作家さんの作品を見て来た」というのを聞いて、先ほど説明があったんですが、中学1年生だと読んでもよく分からない、何をどうしたらいいんだろう、と最初に戸惑ったらしいんです。

その日は、各学校さんから教職員の方がいらっしゃっていて、その先生方の話を聞いて、そういう感じの作品なんだと理解でき、自分で気に入った作品を作文に書いて提出するので、そういったものが、すごくいいなと思います。

それをやるにあたって、先ほど小学校から美術館に興味を持ってもらうというのに対して、やっぱり小学生の早いうちから、触れ合える環境を作って頂ければいいな、というのがひとつ。

それと自分が住んでいる地域が市の端の方なので、やはり、ここまで来るのが、学校の中で授業とすると1時間で収まらず、2時間調整しないといけなくなるので、何かしら休みの期間中、みんなで行ってみよう、というような企画を、今後もっとしていただければ、すごく助かります。

「よし、行ってみよう」という気になりますので、ぜひ今後とも頑張ってそういう企画をしていただければ、と思います。よろしくお願いします。

□教育委員会の方でそういった理解がないと、なかなか難しいところもあるでしょうね。学校と美術館だけで、できる話ではないので。

■実際に教育委員会の方は、小学校に関しては6年間で1学年1回の機会で、少ないといえば、少ないんですけども、他のところに比べて、まだ良い。

もちろん、これ以上の理想的な、例えば、この夏の時期は、このような展覧会を毎年やっていますけれども、おそらく小学生以上の3～4年生からすると、ちょっと対象年齢が下すぎるかな、と。

今のメインターゲットは、どちらかというとも1年生から未就学児が対象となっておりまして、様々な年齢層に対応するっていうプログラムというのは、引き続き頑張っていかななくてはならないのではないかと、思っております。

■担当の方から、ちょっと補足なんですけど、先ほどお話がありました「中学生が夏休みに来て、教職員が解説していた」ということについてなんですけど、これは中学生のためのギャラリーツアーっていうのがありまして、10年以上毎年1日だけなんですけれども、続けている活動で、府中市の教育委員会の美術部の中学校の美術の先生の方々が研修として美術館に来て、中学生を対象としてギャラリートークを現場で行なっている、という活動です。

先生方は、学校で子供たちの姿を見ていますが、どういう風に、実際に見ているかというのを見る機会がないので、夏休みの子供が来たところで、先生も一緒に鑑賞して、先生自身も色々と学んで頂くという、そういう機会にもなっているんで、非常に満足している取り組みです。

あと、もう一つ。小学生で、もうちょっと早い時期から取り組めないかということなんですけれども、決まっておりますので、それ以外でも、なるべく連携の授業をしたいと思っておりますので、ちょっとコロナで、去年は中止してしまいました。

一昨年、実験的に公開制作のアーティストを学校に派遣して授業をするという試みを行っています。またオンラインを使って公開制作の対応するとか、そういったことも。

会場はネットワークの問題があるので、なかなか自然な配信ができないのですが、その他の様々な方法を使って、先生の方では授業をやることができれば、という声も聞いておりますので、いま環境整備を含めて検討してるところです。

□世田谷なんか学校も多い。人口も90万もいるし。

□うちは1986年の開館ですが、ずっと鑑賞教室をやっていて、小学生4年生、中学1年生と固定してやっています。1年間1万人を受け入れているのだから、これまでも35万人ぐらいか、子供達が来ていることになるんですけど、コロナの影響って大きいですね。

緊急事態宣言になりますと、鑑賞教室が止まってしまうので、長い時間をかけて構築してきたネットワークですけれど、美術館と学校と教育委員会の役割分担を全部決めて動いている。

あと、もう一つは鑑賞教室ボランティアというのを募集しております、いま登録者で400名を超えているんですね。この人達は、だいたいリタイアした人たちが多いんですが、主婦とか、何やってるか、わかんないけど、ちょっとお金持ちそうなおじさんとか、いるんですよ。

で、そのボランティアの人たちに、「こんなことをして下さい」と全然、僕たちはお願いをしてない。つまり展覧会の内容の勉強会はやるけど、説明するのは、子供たちに作品を見てもらいたい、というのがあるんですよ。もっと言うと美術館に親しんでもらう時間を作るということ。

鑑賞ボランティアを導入するまでは、学校ごとに来て、クラスごとに、ざっと見て帰っちゃうから、何を見たかよくわからない、覚えてないんですよ。それを毎日、鑑賞ボランティアが来ますので、4から5人のグループを1人のボランティアが連れて歩くわけです。

見る順番も、建物から見る人もいれば、外の彫刻から見る人も。入れば全部バラバラで、要はその人の人生体験と個性と子供達の個性が会う、ということを目指しています。

それをやっているのと、東京学芸大学の単位に結びついているんですが、民間実習で1年間、毎週水曜日に夕方4時から6時まで、15から16人の学生が来ていて、その展覧会ごとに、学校が6割、7割も希望してくれます。

事前の出張授業では、絵の説明ではなくて、例えば「この絵がメインという展覧会なんですけども、ここに登場人物がいたら、この人は、こんな人で、こんな生い立ちなんですけども、この人に手紙を書いてみよう」と、いろんなワークショップやるんですよ。

その出張授業は、学生たちに任せて、子供達がせつかくの時間をどういう風に感じてもらえるか。楽しかった経験があれば、また行こうという動機となります。

冊子を4年生と全中学生に、小学生や中学生用を作って出しているんですが、「また来てね券」っていうのも必ずつけているんですね。それ持ってくると、親はお金を払うんですが、子供は年間通してタダ。夏休みと土日は、それで子供達は結構来ていますね。

中学生は1年生に限定していたんですが、コロナが長くなると、体験できなくなってくる。1年生じゃないと体験できない、としていると、そのため全学年に解放して、パンフレットは中学生用を全学年に配ったんですよ。そうす

ると、やっぱり30年後に、その子達の子供たちが来ている、という状況です。

もう30年経つのですか。

そうですね。35年です。ですから当時、10歳とかが、41歳ですから、当然その子達も来ていて、そういう話が出ますね。「お父さんが来たって言ってました」って。

やっぱり、自治体が美術館を持ってるって、そういう意味では、かなりいいですよ。強みとして。

強いと思います。

そこら辺を、参考にしてもいいですね。

もう完全に行事になっている。カチッと決まってるし、バスの手配も全て教育委員会でやることになっているし、学校との年間、どの展覧会に見に行きたいか、美術館が学校と調整するとか。

でも、そこに来るまで、すごく時間かかったし、「なんか余計な話を持ってくるんじゃないよ」というのが5年、10年あって、やっぱり、すごい苦労しましたね。

でも今のいい形に安定したし、ボランティアの人達の生きがいになっているし、夏休みは中学生がいっぱい来るので、朝からボランティアの人が、エントランスで、10人も20人もたむろしているんですよ。

ボランティア質が悪いと、よくないですよ。

難しいです。

見てないとね。

そうですね。それは時々どうしたって人間同士なんで、ボランティアの方が子供に使うには適当でない言葉を使ったりする時があって、それが問題になる事が年に1件あります。それで僕は夜、学校を訪ねて、校長に謝ったりしたこともあります。

トラブルが解決して、その子供にも会いましたが、いろいろ話をして、「また来てね」って握手するまで持っていく。責任は、そこまで持たないと、子供達を扱うことはできないですね。

そのボランティアの養成は、どうなってるんですか。

これは仕組みを言いますと、うちは成人対象に美術大学という5月から12月まで、7ヶ月間の実技とお勉強とを組み合わせで行っているんですね。

それでいろんな講師の方が来て、目的は絵を描くこと。上手くなること、何かを知るとのことだけではなくて、学校で学んできた、「絵って、こう描かなきゃいけないね」という既成概念を、ほとんどぶち壊されて卒業する、というところなんですよ。

いきなりモダンダンスをやらせるわけです。そうすると、そんなことやりに来たわけじゃないと、壊されるわけですね。書くことの自由さとか、表現の自由さとかというのを、いろいろ7ヶ月間やっていると、ものすごく連帯感が生まれてきて卒業して行くんですよ。

そこがボランティアへのリクルート部門になって、今度は子供達の面倒を見てあげられたらいいな、って。うちの美術大学に通いながら、見ているんですね。そうすると卒業すると、もっとうちの館に関わりたいという気持ちのある人が、どんどん登場してくれるんですよ。だから循環を作って回わしています。

それは、自主登録ですか。

自主登録です。

卒業した人が？

全然、普通の人も来ます。

その美術大学に行かなくてもいいんですか。

全然いいです。普通の人も、いっぱい協力してくれます。

試験はやらないんですか。

試験はやりません。

区民でないといけない？

どなたでも何歳からでも登録できますので、「夏休みだけ、高校生なんだけれども、小中学生の面倒を見たいんですけど」という女の子とか別にそれはOKです。一応、担当者が面接しますけれども、変な話、危ないので、それは注意してます。

世田谷美術館の運営委員会ではないので、それぐらいで。

ご参考までに。

私が今、興味を持ったのは、ガイド養成をやっているっていうのがありまして、これはあの幼児用とか中学校用のとか、ある程度の試験やってパスした人は免許をもらって、ボランティアをやる、ガイドをやるプロフェッショナルというのがあるんですが。

資格みたいだね。ある方が安心ですよ。

それは幼稚園児を担当者がやるし、高校生が来たら高校生がやるし、というような感じで、「来る」という予約が入った時に、待ち構えています。

それは学芸員の仕事とは全然別にあって、学芸員までも感動されていて、忙しくなってしまうんですけども、美術を鑑賞の手引きをする、という人を養成して、いま仰られたようにボランティアの方に、そういったようなエントリーしてもらいたいんじゃないかな、という気がするんですよ。せっかく地域に美術館があるんだし。

資格を欲しい人もいるでしょうし。

■当館もボランティアを運用しているんです。

■ボランティアについては、開館して6、7年目からスタートしまして、当初はNPOに協力いただいて、ボランティア育成の活動始めたんですが、どんなことができるか、ガイドを含めて、様々な活動をこの美術館で行ってきたので

すが、やっぱり不向き向きがありまして、現在ではワークショップの補助を中心にやっただいて、という形です。

外の活動については、いろいろ時期尚早ではないかということで、ちょっと保留にしている状態になっております。

■ ボランティアを導入する一番の利点は、マンパワーを得られることです。作品の解説にしても、授業の運営しても。

一方で壁となっているところが、ボランティアの育成管理と言いますか、単純に名簿を作るだけで大変な作業になりますので、それをどこが担っていくのか、どのようなお仕事にしていくか、非常に難しい側面があります。

マンパワーを得るために、美術館のマンパワーを提供するとなると、なかなか難しいところがありまして、そういう面では世田谷さんの活動は良い面があるのかな、と聞いておりました。

□ 教育普及活動が割と学校のものだったので、そうじゃない視点で、わかりやすさという点の話から言いますと、私の館でも、ここ3年取り込んでいるものとしまして、在住外国人向けに、やさしい日本語の導入に力を入れております。

やさしい日本語は、日本語を学び始めた人にもわかりやすい、日本語検定でN1からN5まであるのですが、そのうちのN3ぐらいまで。日常が最低限わかるのはN5というのですが、N4ぐらいですと、もうちょっとコミュニケーションとか分かる。

N3ぐらいですと、難しい専門的な知識とか表現が分かる程で、ちょっと難しい。N4ぐらいを目指していると良い、という形で私たちも応援しています。

常設展示室のガイドを3つだけインタープリターという解説委員が選んだ展示に絞って、「ここを見てください」というのを昨年度作りました。今年度、取り組んでいるものが、野外で川の生き物観察会で、来週、再来週やるのですが、そのため優しい日本語ガイドっていうのを作っております。

そのデザインをするのに、武蔵野美術大学の芸術文化学科の学生さんにデザインとかお願いしてございまして、優しい日本語がどうして必要なのか、そういうのと一緒に地域の人と学びながら、川の生き物の専門家にも、なぜそういった、やさしい日本語が必要なのかっていうのを、一緒に知ってもらいながら活動して、最終的に成果物を作って、それを今後は、いろんな人に普及して行くという活動をしています。

このやさしい日本語というのが、在住外国人だけではなく、子供にも良かったりして、ちょっと障害の持っている、難しい解説が読みにくい人にも有効だってことは最近言われています。それで東京都美術館が、今年、渋谷のギャラリーの解説を作ったりとか、多分、東京都美術館で今やっている企画展でも作ったようです。

それから在住外国人だけでなく、いろんな人に向けて理解してもらいために、やさしい日本語を導入されているのかな、と思っていますので、ご検討されたら どうか、と思っております。

府中市の場合は、ちょっと今日調べてみると5,000人ぐらい在住外国人の方が住まわられていまして、全体の人口でいくと2%ぐらいしかないんですが、在住外国人のご家庭の方が多くて、これから定住して行けば大きくなっていて、学校へ行ったりとか、色々学んでいく、重要な人たちだと思います。

その人たちが美術館に来るような仕掛けを作っていくのも、わかりやすい解説とか、それが伝わる方法をセットで、やっていくこと。そして地域の人と一緒にやっていくことが大切なのかな、と思いました。

あと、もう一つ。最近、聞いて良かった活動は、熊本の坂本英三記念館美術館でやっている美術部がいいなと思いました。これは地域の中学校の美術部が廃止になってしまったので、美術館が地域のための美術部を作ろうじゃないかと、中学生と高校生が参加できる美術部を作ったそうです。

お金、食費は集めるそうです。それで材料買って美術館内でやっているのではなく、地区センターみたいなところを会場に活動している、ということなんです。府中市の場合は、美術部っていうのが足りている、と思うんですが。

学校には、なじまない子がいて、うちのジュニアボランティアでもそういうのですが、学校で浮いてしまうと、そういう公共の場に行ってきて、他の人と好きなもの、アートを介して、大人とか友達ができるというのが、いいなと思ったりしていて、もしかして府中市美術館でも地域のための美術部というのができ活動ができたらいんじゃないかな、と思います。

小国町です。行ったことがない。

坂本さんの私設なんですかね。公立かどうか。

■あれも公立で、私もそれ作った時に通ったりとかしたんですが、びっくりしました。その話が出まして。極めて良い場所にあるんです。和風の美術館で。

□古民家なんですよ。

■ すごく現代的なアーティストが装飾などして、逆に地域の人にとって誇りになっていると思うので、いま仰ったことは非常に理解できます。

□もう一つ、ついでに言うと、善三さんと呼ばれているらしく、とても地域の方に親しまれていて、善三さんのプロダクツ展というのを、今やっているそうなんです。

作品をモチーフとした、どんなツールが作れるか、というのを公募して集めて、それを展示して展覧会をやってる最中なんですけども、それはすごく町が一つになって盛り上がっています。

人口比で考えると、たぶん違うんですけども、観光を諦めて、地域の人に特化したミュージアム活動をしたいと、すごくいいんじゃないかと思います。

□わざわざ熊本に、そのために行ったんですか。

□違います。私は月に1回、全国の博物館の人達とコロナで困ってるころとか、色々情報交換をする、オンラインミーティングやっております、その中で森美術館の方と、坂本善三さんの記念館の人達と、オンラインを通じた教育普及プログラムを实践されてまして、その広告を見た時に、非常に驚いたんですね。

□色々意見をまた言ってください。時間が迫ってきたので、申し訳ないんですけども、次、あと二つやんなきゃいけないので。

施設整理。先ほどありました。老朽化しているから、どうにかしろとかね。LEDじゃないとか、前の答申でも随分出ていますが、設備についてご意見のある方いかがですか。

□子供家の展示があったり、初めてアートで赤ちゃん向けの企画があったり、本当に親子にも優しい美術館だな、と思っていて、私自身、小学6年とき初めて来た美術館が府中美術館で、子供達を最初に連れて行った美術館も、府中市美術館なんです。

小さい子供を連れて美術館に出かけるというのは、色々用意周到にしていかなければいけなかったり、準備してからじゃないといけないんですけども、まず、その美術館には、おむつ替えの場所があるのか、授乳室があるのか、貸し

出しベビーカーがあるのか、この三つは、ほとんどのお母さんが調べたりすると思うんです。

専用のネットを検索すると、おむつ替えシートとベビーカーはあるんですが、授乳室は、誰でもトイレを使う方式でホームページに案内されていて、府中市美術館を検索すると、一番出てくるのが「ここは、授乳室が多目的トイレになっているので、衛生的にどうかなと思ったので、公園で」とか、そういう意見があります。

「多目的トイレだったけど、受付の人が気を利かせてくれて、パーテーションを作って臨時で授乳室を作ってくれた」とか、そういう意見もあって、やっぱり授乳室があるか、ないかというのが、すごく大きい。

美術鑑賞するために1時間弱は必要になるので、1時間弱の間にしっかり子供達のご機嫌の状態のコンディションでいてくれないと困るので、必ず授乳とオムツ替えを挟まないといけないと、ほとんどのお母さんは思うので、やはり授乳室は、あったほうが良いと思うので、施設の改修とかあった時に、2畳、3畳とか狭いスペースでいいので、区切られたスペースがあるだけで良いなと思いました。

あと多目的トイレは綺麗で、私は抵抗ないんですけども、今、コロナ禍の中で、トイレで授乳っていうのはどうかな、というのと、上の子がいた時に、授乳中に上の子がトイレでしゃがみこむだろうな、床を触るだろうな、色々考えると難しいのかな、と思いました。

あと小さい子を連れてた時に、いろんなヒヤリハットがあると思うのですが、ちょっとこの美術館の中で、ドキッとしたことがあって、二階から一階に下がる階段、展示室が終わってロッカールームの方に下がって行く階段のところで、スロープのところなんですけど、スロープの間の隙間があって、そこに手すり通っていて、これくらいの空間があるんですね。

子供がしゃがむと普通に通れるような感覚で、息子がくるっと落ちそうになって、これ危ないなと、ドキッとしたことが一回ありました。ちょっと何か塞ぐ棒のようなものがあればいいなと思いました。

あと入口のアルコール噴霧器も、ちょうど小さい子が手をかざした時に、目にかかる高さになると、意外にかかる子もいたので、府中市美術館では広がるタイプではなかったのでもいいんですけど、手を出した時に危ないな、と思ったりしたことがありました。

それはそうですね。危ない。

□1回やったことあるんですね。モロに目にかかって、怖いな、と思いました。

□乳幼児を連れてきては、いけないとか、そういうのはないですね。

■ないです。

□来ちゃいけないところとかは。

■それはないです。ただ今おっしゃったように、授乳室っていうのがありませんでしたので、多目的トイレを利用させていただいているところです。言われた場合には、図書室も案内しています。

■もう一ついいですか。お母さん方が、いらっしゃった時に、一番心配するのは泣いたらどうしようかっていう話がありまして、全員そうですけど、みんな赤ちゃんの時があった訳で、泣くのは、お仕事。どうぞ気兼ねせずに来てください。

□そう言っただけの優しい人が全員と思わないので、何人かは言われたりします。お母さんは「絶対に泣かしてはいけない」と思いながら、絵を見ている。

でも府中市美術館は、そういう雰囲気はなくて、優しいなと思っていて、子供連れでも通いやすいから、0歳児で初めて美術館に行けるというのは、すごいことだと思うのですけれども。

府中市に美術館があるから、府中市の子供は小さいときから行くと思いますし、そういうのがひとつあるっていうのは、すごい財産だと思うし、私は「府中市で子育てが出来るのは、すごく幸せだな。美術館があるし」と思っています。

■私も数回、お客さんに怒られましたけども、やっぱり会話ぐらいしながら行けるといえるのが必要だと思うので、それをきっかけにコミュニケーションができたりすると、そういう風に考えてやってたらどうかな、と思います。

□赤ちゃんの特別な日っていうのがあったんですか。赤ちゃんを鑑賞しようっていう日が、あったんですか。

■ 0歳児のため、お母さんとお父さんと。

□それは1日だけですか。

■ ちょっと説明しますと、「子育て広場、初めてアート」というのがありまして、保育支援課と地域センター担当の保育士がおりまして、市内のいろんな施設を使って子供と親が集まって、主に保護者の方がリフレッシュするための活動になっております。

その美術館版なんですけども、例えば、この会場で集まって、今、コロナなので、10人ぐらいなんですけども集まって、子供の手遊びだけでなく、展示室へ行って、学芸員が常設展示を案内する1時間ぐらいの活動を行っております。

年間に現在4日ぐらい実施しているところです。府中は引っ越しをしてきて、ちょうどお子さんができて、初めて美術館にいらっしゃるとか、非常に好評な企画になっております。学芸と保育士とのコラボレーションになっております。

□その周知というのは、どういう形で、お母さん達に行っているんですか。

■ 保育支援課の方で、広報府中などの広報誌などを使って、広報をしております。

□ 保育園の前とかにも貼ってあって、「初めてアートがあります」と。割と倍率が高くて、申し込んでもダメとか。

■ 人数制限は、基本的に12組です。

□ 一か月のうちに1回ぐらい設けてある時間帯に、どうぞって、お母さん達がいらっしゃれたら良いんじゃないか、と思います。それ優先とかそういうのじゃなくて、それは本当にあった方がいいんじゃないかと思います。

■ 現状の事業が美術館単体でというよりは、どちらかというと、子育て支援の枠です。美術館に来てくださってというのではなくて、小さなお子さんを持つてお母さんたちの精神的な面での支援ということで、視野に入れてやっております。

□それすごく必要なことだと思いますね。今、お母さんが追い詰められているので、あまり混んでないような時間帯に、例えば午前中の2時間とか、お母さんと赤ちゃんと、どちらも心豊かになるために、どうぞというようなキャンペーンを出したらいいですね。

□この答申書にも出てるんですけども、やはり下りのエスカレーター、高齢者ばかりでもなくて、ハンディキャップがある人、子供を連れてきている人、それから、私の知り合いは生まれる前から、ここに連れてきて、その子がちょこちょこ歩き出して、そういうことも考えると、いろんなことありますけれども、今この時代に登りだけあって下りがないっていうのはないですよ。ぜひ考慮していただきたい。

□前の答申にも書いてあるので、ですから多分、市も当局にかけあってくれてる、とは思います。

■大変貴重なご意見をありがとうございます。高齢者の方も階段を降りることは非常に困難なので、やろうと思っております。

□多分、実現するだろうと思えますけれども、今は作品用に使ってるんですよ？ 隣のエレベーター。

■元々エレベーターはあるんですが、非常に分かりにくくて、使いづらくて、正反対の場所です。

□あれはでかいですよね。最初から作っとけばよかったのにね。

■元々エレベーターは、ふたつは認められなかった、当時の事情がありましたが、いま必要だと思っております。

□あと他にどうですか。施設整備等について言い始めるときりがないんですが、前の答申に出ているものも、多分、当局が受け止めて前向きにやっているといるんですが、その他に、いま話があったように気がつかないところが、もしあったら仰っていただけたらと思います。

時間が過ぎて申し訳ないんですが、五つ目の広報活動。これも前の運営会で随分まだまだ足りない、もっと提案すべきだっていうのは出ていて、この答申

にもたくさん書いてありますが、他にどうですかね。これにプラスして、この辺のこととか、こうやったらとか。

□コロナになってから、Y o u T u b e の配信ですとか、新しいホームページの運営とか、新しいお仕事が増えているんだなと思うと、広報という専門の人材が必要ではないか、と心配なんです。すごく大事なお仕事だと思うので。

例えば作家さんの教育普及ですとか、Y o u T u b e ですとか、アップして一連の作業に非常にたくさんの時間を割くでしょうし、それぞれの担当の方がなさって、すごく大変なことだと思いました。

そういうことだけでなく、年間スケジュールの内容も学芸員や館長が、楽しくY o u T u b e で紹介して頂いて。なぜならば今、予約しなければ入れない人数制限かかっていることもあるかもしれませんが、そういった時に非常に予定が立てやすいかな、と思います。

そういう、いろんなものを、これからアップしていくことが考えられますが、そうしたら、すごい大変だろうと思いますので、もしそういう人材が必要ならば。

□今、広報担当っているんですか。

■一応一人おります。広報にあたっている職員がいるのですが、常勤の学芸員の一人が広報の分野を統括しています。全部をするというよりは、身近な広報、それから何かを深く考えて、企画の調整を担っていきます。

それから美術館のホームページの更新につきましては、美術館の臨時職員アルバイトが行なっております。

それ以外の広報媒体については、動画などについては、これは製作を外部の業者に委託するため予算確保していく体制を取っています。本当は専従で誰かってことになると、もっと細かくやることができるかもしれませんが、今は外部の発注で広告を行っている、という形になっております。

□ぜひ充実させていただきたい、と思います。

□上の方に書いてあるアートスタジオなんていうのは、そこがある程度行ったんですか。

■こちらの教育普及の制作は、内容を教育普及担当学芸員がやっております、外部に発注して、業者さんや講師の方と相談しながら作り上げるという形になります。

□4時に終わる予定でしたが、オーバーしてしまいました。けれども、まだその他なんでも、という項目もあるので、何でもどうぞ。

□是非、お願いしたいのは、いろんな状況に、これからなると思うんですけども、閉めないでいただきたい、ということです。開け続けて欲しいです。

□美術館自体を閉めることなく、展覧会をいつまでもやっていて欲しい。

□美術館に明かりを灯してほしい。先ほどからのお話しに、子育てのお母さん方のお大変さも、それを緩和する場所でもあり、子供たちが唯一来られる場所でもある、という話も伺いました。

市民限定の快感っていうのも考えていただいて、「本当に、ここに美術館があって良かったね」っていうプレミアムな感じもしますし、とにかく協力して頂いて開け続けて欲しいです。

□コロナが本当に増えてしまいますと、それこそ東京都で一日一万とかなると、なかなか判断が難しいですね。

□上野は行けないけど、自分の市にありますから市民だけしか来ないし、そういう考え方もできるので、開けていて欲しいな、と思います。

□「みんなに希望を」ということですよね。

□美術館は直営なので、多分、今年度で総合計画が終わるみたいですけど、次の年度では美術館の役割とか、期待されている事とか、どんなものがあるのか、ちょっと気になります。

その市の戦略の中で、美術館がどう位置づけられるかによって、予算の割り振りも変わってくるだろうし、その市の中の課題を解決するのに、美術館が役立つことがあれば、美術館により大きな資源を割こうじゃないか、っていうことになるのかと思います。

■直近の総合計画については、現在、確定中のところですが、大筋において、この一つ前の現行の総合計画を維持する、という形になると思います。

その中で美術館活動は、維持しているということになります。逆に言いますと、「さらに発展を」ということなんですが、なかなか市自体が様々な課題を抱えておりますので、大規模なことは難しい側面もあるのかもしれませんが、理事者の方から期待されているのも確かなので、こうした場で逆に皆様からの意見が美術館活動の助けになる、と期待しております。

□ちょっと違う面になるのですが、例えば健康増進とか貢献する美術館とか、いろいろな発展とか言う事が出来るのかな、と思います。うまく活用して是非いろんなところから資源を、と思いました。

■それは本当におっしゃる通りで、継続するだけでなく、もうちょっと高いところ目指しながら、やっていくことによって、市民全体のプライドみたいなことに寄与していきたい、と思っております。

そのためにも全体で、スタッフも含めて、頑張ってみたいと思います。ありがとうございます。それ本当にいい意見です。

□すいません、時間が伸びてしましまして。まだまだご意見があると思いますが、どうしてもというのがなければ、今日はこの辺でおしまいにして、何か事務局ありますか。次回も会合がありますので、思いついたことをどんどん言っていたいただければ、と思います。

それでは今日の議題は、これで終了ということにいたします。皆さんお疲れ様でした。どうもありがとうございました。最後は事務局に戻します。

■皆様、長い時間にわたり、ありがとうございました。

本当に活発なご意見、貴重な示唆をいただきまして、美術館に非常に役に立つ、と言うと怒られますけど、この後、皆様から頂いた、ご意見は事務局の方で整理しまして、次回の議論の資料となりますように、次回会合の前に送らせていただきます。

次回の会合ですけれども、本年の12月乃至、1月頃の開催を予定しております。日程の調整は改めてさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、以上で第2回 府中市美術館 運営協議会を終了します。本日はどうもありがとうございました。